

『水滸傳』成立考

——内容面からのアプローチ——

小 松 謙

京都府立大學

『水滸傳』の成立については、多くの先行研究が存在する。ただ、相互に矛盾した結論が生じた場合、いずれが正しいかを定めがたいことが多い。これは、文献が乏しいためどうしても主観的な意見の對立に終始しがちであり、議論が客観性を持ちがたいことに由来しよう。では、どのようにして議論に客観性を持たせればよいのか。

ここで有効ではないかと思われるのは、語彙・テクニカルチームの分析である。成立を異にする部分の間では、語彙やその用法に違いがあることが豫想される。同様のことは、藝能との関係の痕跡を示す一連のテクニカルチームについてもいえよう。従って、これらの用例數及び用法の分

布を調査・分析すれば、ある程度客観的に『水滸傳』の成立史を描き出せるのではなからうか。

しかし、この分析を行なうにあたっては、一定の目安が必要であろう。そこで、まず本論においては、主として『大宋宣和遺事』との関係を手がかりに、内容面から容與堂本『水滸傳』^①の成立過程についての假説を提示してみたい。しかる後に、次號掲載豫定の論文において、語彙・テクニカルチームなどの使用分布に基づいてその假説を検證する豫定である。なお語彙等を扱う關係上、テキストを固定する必要があるところから、ここでは容與堂本のみを限定的に對象とする。

なおこの研究は、もと京都府立大學大學院生であった高野陽子氏の語彙調査から出發したものであり、本論は高野氏と小松の共著になるべき論文の前段階として、小松が執筆したものである。従って、次號掲載豫定の論文は共著となること、本論文は發表の都合上小松單獨名義による獨立した論文の形式を取ってはいるが、本来は二つの論文を合わせて共著とすべきものであることをご了解いただきたい。

『水滸傳』は元末明初に、施耐庵もしくは羅貫中、あるいは二人の合作によつて作られたと言われてきた。施耐庵の正體について、これまで多くの議論がなされてきたのも、もとより『水滸傳』の作者について少しでもその眞の姿を知りたいという願望あればこそであろう。しかし、施耐庵・羅貫中が『水滸傳』の作者だという決定的な證據があるわけではなく、また假に彼らが『水滸傳』を書いたことが事實であるとしても、それは現在『水滸傳』と呼ばれている書物が、元末明初當時彼らによつて制作されたものと同物であることを意味するものではない。この點については、すでに先人により數多くの研究がなされているが、ここでは現存する『水滸傳』に見られる思想的傾向から検討してみたい。

容與堂本『水滸傳』第三十八回で、李逵の不調法をわびる戴宗に對して宋江はこう言う。「他生性是恁的、如何教改得。我到敬他眞實不假（生まれつきこうなのだから、改め

【水滸傳】成立考（小松）

させることなどできるものですか。私はむしろ彼の眞實にして偽りなきところを敬びます）。これは、明代後期という時代の刻印を背負つた言葉といつてよい。

「眞實不假」、これこそかの李卓吾が「童心説」において最も價値あるものと規定したことであつた。^④そして「童心説」においては、その「眞」にして「假」ならざる文學の典型として、『水滸傳』の名を『西廂記』とともにあげたのである。李卓吾に限らず、いわゆる陽明學左派、更には必ずしも陽明學の徒とはいえない李夢陽ら復古派の人々の間でも、「眞」にして「假」ならざるものの追求は最大の目標であつた。^⑤つまりこのせりふは、明代中期以降の思想狀況を背景に持つており、元末明初段階においては生まれえなかつたものといつてよからう。ただこれはわずか一語のみであり、例えば萬曆期に入つて出版に當たり挿入されたと見ることもできよう。しかし同様の傾向は、人物の描寫、更には評價の仕方など、物語の展開を大きく左右する要素においても認められるのである。その最も顯著な事例は、魯智深と武松の關係に見出されよう。

魯智深と武松は、林冲・花榮ら技巧派と好對照をなす、いわば體力派の豪傑という點で共通する。しかし一見豪放なばかりに見える兩者は、實は性格において大きな違いを持つていたのである。それは二人が人を殺す場面において、非常に鮮明に現れてくる。^⑥

魯智深による殺人の最も有名な事例は、いうまでもなく第三回の「拳打鎮關西」であろう。そこでは魯智深は、鄭屠の非道な行動を聞くや、ただちに殴りに行こうとして史進と李忠に止められ、夜もおちおち眠れず、翌朝被害者の金親子を逃がすと、鄭屠に肉を切らせ、相手が疲れたところで殴る。ところが、ただこらしめるだけのつもりが、勢い餘つて相手を殺してしまい、あわてて逃げ出す。この場面における魯智深は、ほぼ終始一貫して直情であり、弱者のため前後の見境なくふるまう。しかもその殺人は意圖したものではなく、けんかの戦術として素樸な策略こそ用いるものの、彼の行動には計畫性が全くない。他の箇所でも、魯智深は決して無意味な殺人を犯さない。

一方武松の殺人としては、第二十六回における潘金蓮殺

しと第三十一回における鴛鴦樓のくだりが代表としてあげられよう。前者において武松は、何気なく兄を弔うと見せて關係者一同、更には證人として近所の人々まで呼び集め、潘金蓮と王婆の供述書を取り、署名までさせた上で潘金蓮を殺す。武松は終始一貫して冷静沈着かつ計畫的、そして冷酷である。鴛鴦樓における大殺戮は、一見粗暴の極みのようだが、よく讀むと、彼は凶行の前に着替え、荷物をすぐ持ち出せるようにし、逃走ルートを確保した上で行動に移つていたのであり、極めて冷静かつ計畫的であるという點において、實は潘金蓮殺しと共通する。しかも、全く無關係な奥方や召使いまで容赦なく皆殺しにするという點で、冷酷さにおいてもまた共通するのである。^⑦

後半に入ると、二人はペアを組むことになる。第五十八回において、魯智深が史進を招くために少華山に行きたいと申し出た時、宋江はこう言う。「然是如此、不可獨自去。可煩武松兄（弟^⑧）相伴一遭。他是行者、一般出家人、正好同行（とはいふものの、獨りで行つてはいけない。武松についていつてもらおう。彼は行者だから、出家同士、一緒に行くには好

都合だ」。つまり宋江は魯智深一人では不安だとして、武松をつけるのである。果たして宋江の豫見通り、史進が賀太守に捕えられたことを知った魯智深は、武松の諫めを聞かず、猪突猛進して賀太守に捕えられてしまう。魯智深を見送る武松の言葉は「不聽我説、此去必然有失（わしの言うことを聞き入れなんだが、きつとしくじるに相違ない）」であつた。

つまり、明らかに豪傑としては思慮分別に富んだ武松の方が一枚上手である。そして、武松が鴛鴦樓に自ら「殺人者打虎武松也」と記したように字を讀めるのに對し、魯智深は第三回末に「却不識字」と明記されているように、文盲と設定されている（なぜか死ぬ前に突然傷を書くが）。ところが、二人のうち上位に位置づけられているのは、明らかに魯智深の方なのである。そもそも宋江の言葉にもあつたように、彼らは「一般出家人」ではあるが、魯智深が「花和尚」であるのに對して武松は「行者」である。つまり二人はいわば主人と從者の關係にある。この關係は第九十九回に至つて最も鮮明に示されることになる。ここで魯智深

『水滸傳』成立考（小松）

は坐化する。それぞれに悲劇的な末路をたどるものが大多数を占める百八人の中でこうした終わりを迎えることは、魯智深こそ梁山泊中最も高い價値を賦與されている人物であることを示すものである。彼こそは生きては活佛、死しては佛たるべき者と見なされているのである。そして、すでに片腕を失つていた武松は、魯智深の靈を守るが如く、その地で道人となつて生涯を終える。ではなぜ思慮に缺ける魯智深の方が上位に置かれるのか。

それを顯著に示すのは、容與堂本に付された「李卓吾」（實は葉晝か^⑨）による批評である。第六十二回、石秀が盧俊義を救い出すべく單身刑場に斬り込む場面に付けた總評に言う。「若夫依顧願盼、算利算害、卽做天官、何能博李卓老一盼乎（右顧左眄して利害を計算するような者は、たとえ神様であろうとこの李卓吾が目止めるに値しようか）」そして、魯智深が鄭屠を殺すくだりには、「仁人、智人、勇人、聖人、神人、菩薩、羅漢、佛」と考えられる限りの贊辭を書き連ねる。もとよりこの批評は李卓吾自身の手になるものではないと思われるが、李卓吾によつて代表されるいわゆ

る陽明學左派の思想を踏まえていることは明らかであろう。そこでは思慮分別は否定され、前後の見境なく正しいと信ずることを實行することこそが重んじられる。そして岸本美緒氏が指摘しておられるように、これは明代後期の時代的風潮の特徴でもあった。

二

この觀點からすれば、分別に富んだ武松は世俗に汚された「假」の要素を持つという點で、純粹無垢なる魯智深には及ばないという、通常とは逆の結論が導き出されることになる。つまり、容與堂本『水滸傳』においては、明代中期以降にならなければ現れない基準によつて人物像が描かれていることになるのである。この點からしても、容與堂本『水滸傳』本文の成立は、施耐庵・羅貫中より遙かに下る明代中期以降になるのではないかと思われる。

しかも容與堂本以降の展開を見ても、田虎・王慶征討の部分をつけ足したさまざまな簡本（刊行自體は容與堂本に先行するものを含む）、繁本で初めて二十回をつけ足した百二

十回からなる楊定見本、その百二十回本から四十九回を削った七十回（正確には「楔子」一回分が加わる）からなる金聖歎本など、さまざまなテキストが刊行されている。しかも、繁本にかぎって論じたとしても、これら諸本は單に盛り込まれた内容に増減があるだけでなく、文面にも大幅な書き換えがなされているのである。

例えば金聖歎本において、金聖歎が自分の主張に合うように文面をかなり大幅に書き換えたことは周知の通りである。⑩そして、金聖歎はしばしば先行するテキストに對して激しい批判を加える。では金聖歎の批判對象となつてゐるのはどのテキストなのであろうか。それは、金聖歎本の初めの部分に置かれてゐる「讀第五才子書」を一見すれば明らかである。そこには言う。

近世不知何人、不曉此意、却節出李逵事來、另作一冊、題曰壽張文集。可謂咬人屎撮、不是好狗。

最近誰だか知らないが、このこと「『水滸傳』において李逵が擔うトリックスターの役割」も理解せず、李逵のことだけを抜き出して『壽張文集』と題してい

る。人の糞を食らうたぐいでろくなものではない。

ここで問題にされているのは誰なのだろうか。容與堂本に付されている「批評水滸傳述語」には次のように言う。

和尚讀水滸傳、第一當意黑旋風李逵、謂爲梁山泊第一活佛、特爲手訂壽張縣令黑旋風集。

和尚〔李卓吾〕が『水滸傳』を讀まれて一番お氣に召したのは黑旋風李逵で、「梁山泊一の生き佛」とし

て、特に手ずから『壽張縣令黑旋風集』を校訂された。

つまり、金聖歎が攻撃しているのは容與堂本の「李卓吾」、即ちあるいは葉書ではないかと推定される人物ということになる。このことは他の箇所からも見て取ることができる。

例えば「讀第五才子書」には言う。

如史記須是太史公一肚皮宿怨發揮出來、……水滸傳却不然。施耐庵本無一肚皮宿怨要發揮出來……。

『史記』の如きは司馬遷が腹一杯にたまつた怨みを放出したもので、……ところが『水滸傳』は違ふ。施耐庵には元來放出すべき腹一杯にたまつた怨みなど存在せず……。

『水滸傳』成立考（小松）

これに對して、容與堂の「忠義水滸傳敘」には次のようにある。

太史公曰、說難・孤憤、賢聖發憤之所作也。……水滸傳者、發憤之所作也。

司馬遷が言うには、「說難」「孤憤」は聖賢が發憤して著したものである」と。……『水滸傳』は發憤した結果著されたものである。

金聖歎本がことさらに容與堂本に異を立てようとしていることが見て取れるであろう。となると、よく知られているように金聖歎が宋江を徹底的に敵視するのも、容與堂本が「然未有忠義如宋公明者也（しかし宋江ほど忠義な人はいない）」ということに對する反撥に由來するものかもしれない。更に、金聖歎が「第五才子書法」で

魯達自然是上上人物、……然不知何故、看來便有不及武松處。

魯達はもちろん上上の人物である。……しかしなぜか、見るに武松に及ばぬ所がある。

というのは、先に述べたように『水滸傳』の内容とは背馳

するのだが、これも容與堂本が前述のように魯智深を絶讃することへの批判から出るものかもしれない。もとより金聖歎本には、魯智深が坐化するくだりは存在しないのである。

このように、金聖歎本においては、容與堂本に對する批判という、本質的とは言い難い要因に左右されて、テキストに變化が生じているのではないかと思われる。そして最終的に通行本の地位を獲得するのが金聖歎本であつて見れば、容與堂本といえども、明初以來の『水滸傳』變容の一過程を示すテキストに過ぎないということになる。つまり容與堂本は、たまたま現存する『水滸傳』諸本の源流をなすものに過ぎないのであつて、これが『水滸傳』というもののもっとも完備した姿を示していると言つてしまうことには問題があると考えられることもできよう。

それでは現存諸本中最も古い段階を示す容與堂本『水滸傳』は、どのようにして成立したのであろうか。まず『水滸傳』に先行する文献を手がかりに、内容・構成面から考へてみよう。

三

容與堂本『水滸傳』（以下單に『水滸傳』という場合は容與堂本をさす）に先立つ梁山泊物語を語る文献としては、史書を別にすれば、『大宋宣和遺事』（以下『宣和遺事』と略稱）と、一連の雜劇があげられよう。これら二種の文献には、その利用を困難ならしめる共通する條件が存在する。即ち、成立年代を確定しえないことである。『宣和遺事』の成立時期については、南宋から明初まで多様な説があり、いまだに決着を見ていない^⑬。ただ、少なくとも容與堂本『水滸傳』に先行することだけは間違いないであらう。

雜劇については、現存十種のうち「双獻功」「李逵負荆」「燕青博魚」「黃花峪」「爭報恩」「還牢末」の六種は、『録鬼簿』『録鬼簿續編』に著録されているところから、おそらく明初までに成立したものと考えられている。しかし筆者が別稿で詳しく論じたように、元雜劇のテキストは明代に大幅な改變を被っている可能性があり、現存テキストが

どこまで元代當時の姿を留めているかについては、分からないとしか言いようがない。しかし、少なくともストーリーについては、大體元代當時における梁山泊物語の内容を傳えていると考えてよいものと思われる。

では、これら二種の資料はどのような内容を持つのか。

まず雜劇の方から検討してみよう。すでに指摘されているように、^⑤六種の雜劇は基本的に同じ構造を持つ。まず前提として、すでに三十六人乃至百八人の頭領を擁する安定した存在としての梁山泊が示され、そこから頭領が下山していく。下山した頭領は何らかのトラブルに巻き込まれるが、それを解決し、悪人を捕えて山に戻る。宋江は悪人の處刑を命じ、祝いの宴を開く。そして興味深いことに、「李逵負荆」を唯一の例外として、これらの雜劇において演じられている物語は『水滸傳』では語られない。

これは一見奇異な事實のように見えるが、考えてみれば當然のことである。『水滸傳』で語られているのは、梁山泊集團の形成と崩壞の物語である。具體的には、第七十一回において百八人の勢揃いが傳えられるまでが形成過程で

『水滸傳』成立考（小松）

あり、第七十五回以降、招安の動きが始めてからは崩壞の物語ということになる。それに對して、雜劇の世界においては梁山泊集團は永續的な、安定した存在であつて、豪傑たちはそこから一時離れ、また回歸していく。逆に梁山泊以外の人々からすれば、突然異世界の人間である梁山泊の豪傑が出現し、トラブルを解決した後また異世界へと去っていくのである。

この構造が、たとえば西部劇や股旅物、あるいは一部の騎士道物語のそれと類似していることは一見して明らかであろう。そして、そうした物語が集團を主軸に置くものである場合、例えばロビン・フッド集團のように、少なくとも民間レベルに近い傳承においては、最終的な崩壞を念頭に置きつつも、冒険を語る限りにおいては、その集團は崩壞の危険性を意識しない永續的なものとして語られるのが常であろう。ところが、『水滸傳』において安定した梁山泊を背景に持つ部分は七十二・三・四の三回、更に嚴密に言えば招安を受けるための工作にあたる七十二回も排除されるであろうから、第七十三・四の二回にすぎないこ

とになる。この部分に導入されている「李逵負荆」を唯一の例外として、雜劇の物語が全く『水滸傳』に含まれていないのもいわば當然ということになろう。安定の物語である雜劇の内容は、成立と崩壊の物語である『水滸傳』には入り込みえないのである。

つまり元代當時民間で傳承されていた梁山泊物語は、義賊集團から訪れた豪傑による事件の解決とその歸還という、世界各地に傳承される物語の定型に沿ったものだったのではないかと思われるのである。それがなぜ現行の『水滸傳』のような形になったのか。そこで問題となるのが『宣和遺事』の存在である。

次に『宣和遺事』で語られている梁山泊物語を要約してみよう。周知の通り、『宣和遺事』は徽宗皇帝の一代記であるが、その元集から亨集にかけての部分に梁山泊物語の古い形態と思われる、明らかに語りの特徴を持った物語が挿入されている。『宣和遺事』に見える梁山泊物語は、大きく分けて四つの部分からなる。

①花石綱物語

徽宗皇帝の命により、江南から名花・名石を開封の都に運ぶ(花石綱)ことになった楊志・李進義・林冲・王雄・花榮・柴進・張青・徐寧・李應・穆横・關勝・孫立の十二人は、義兄弟の契りを結ぶ。孫立を待つうちに遅れ、雪で動きがとれなくなった楊志は、路銀を稼ぐため刀を賣ろうとしてチンピラにからまれ、相手を殺して流罪にされる。李進義ら十一人の義兄弟は、護送役人を殺して楊志を救出し、太行山に上って山賊になる。

②生辰綱物語

北京の長官梁師寶は、縣尉馬安國に命じて、開封にいる蔡京のもとへ誕生祝い(生辰綱)を運ばせる。馬縣尉らは途中で八人組にしびれ薬入りの酒を飲まされて、財寶を奪われる。捜査の結果、犯人は鄆城縣の晁蓋・吳加亮・劉唐・秦明・阮進・阮通・阮小七・燕青と判明する。警察の董平が逮捕に向かう前に、鄆城縣の役人宋江からの知らせを受けた晁蓋は、逃走して楊志ら十二人と合流し、「太行山梁山泊」で山賊になる。

③閻婆惜殺し

晁蓋から禮として金のかんざしを贈られた宋江は、馴染みの娼妓閻婆惜にそれを與えて、晁蓋との關係を知られてしまふ。父の病氣見舞いに行つた宋江は、途中で漁師の杜千・張宥、お尋ね者の索超、晁蓋を捕え損ねて逃亡中の董平と出會い、紹介狀を書いて梁山泊に上らせる。鄆城縣に戻ると、閻婆惜は吳偉という男といい仲になつていたので、怒つた宋江は二人を殺して逃亡する。九天玄女の廟に逃げ込んだ宋江は、そこで「天書」を手に入れる。そこには三十六人の名があつた。

④三十六人集結

宋江が朱全・雷横・李逵・戴宗・李海ら九人を引き連れて梁山泊に上つてみると、晁蓋はすでに死んでいる。その後、討伐に來た呼延綽・李横を降参させ、魯智深をも仲間に加え、三十六人そろつたところで泰山にお参りする。後に張叔夜という元帥に誘われて宋江らは朝廷に歸順し、官位を得る。

『水滸傳』成立考（小松）

一見して明らかのように、『宣和遺事』で語られているのは「成立」の物語であつて、「安定」と「崩壞」についてはほとんど語られることがない。語りの形式において示されている通り『宣和遺事』の梁山泊物語が語り物に起源を持つとすれば、おそらく演劇（そしておそらくそこに反映されている民間傳承）で扱われるのが「安定」の物語であるのに對し、語り物では「成立」の物語が題材となつたのであろう。これは一つには、短篇であることを原則とする演劇と、續き物という形式を取りうる語り物との形式上の差異に由來するのではなからうか。

ただし、『宣和遺事』で語られる成立の物語は、『水滸傳』のそれと必ずしも一致しない點を有する。最も大きな違いは、いうまでもなく花石綱物語の扱いである。『宣和遺事』で物語の發端となつてゐるこの挿話は、『水滸傳』においてはわずかに第十一回において楊志の口から語られるのみで、ほとんど消滅してしまつてゐる。その後のストーリーは、『水滸傳』における生辰綱・閻婆惜殺しと大筋において一致するが、生辰綱のメンバーや護送役が異な

ること、人名の異同など、細かい違いは多數ある。この變化は何を意味するものであろうか。

ただし、この點について考える前にもう一つ検討しておかねばならない問題がある。それは、果たして『水滸傳』は『宣和遺事』を踏まえて作られたものと考えてよいのかということである。ともに梁山泊の物語とはいえ、兩者が同系統に屬するという保證はない。兩者は同じ題材を全く別々の方向で扱った、相互に無關係の物語である可能性ももとより排除はできないのである。

ただ、『水滸傳』の内容を仔細に検討してみると、『宣和遺事』そのものに依據していつまで限定することは不可能ではあるにせよ、少なくとも『宣和遺事』とはほぼ同系統に屬する物語が『水滸傳』の原據の一つになっていることは間違いないものと思われる。それを示すのは、さきにふれた楊志による花石綱に對する言及である。ここで楊志が何の必然性もなく、自分一人の來歴として『宣和遺事』の花石綱物語に該當する話をすることは、『水滸傳』の前段階においては花石綱物語が存在したことの痕跡と見ることに

ができよう。

同様のことは盧俊義の扱いにも見て取れる。『水滸傳』における盧俊義は甚だ奇妙な存在である。突然宋江と吳用が、元來アウトローなどとは縁もゆかりもない盧俊義をどうしても仲間入りさせようと思ひ立ち、そのために非常に手の込んだ策略を弄し、その結果として石秀らの生命も危険にさらされ、あげくの果てには北京を火の海にするという大事件にまで發展する。しかも宋江は、本人や周圍の猛反對をも聞き入れず、結果的に仲間入りせざるをえなくなった盧俊義に首領の地位を譲ると言い張り、最終的には第二位という席次を與える。そしてこの間もその後、盧俊義がすぐれた能力を發揮する場面は特にない。なぜこのような不自然な設定になっているのか。それはおそらく盧俊義が花石綱グループの首領だったからであろう。それゆえ彼は當然第二の地位を占めねばならない。ところが、楊志以外の人物は花石綱物語から排除されてしまっている。そこで、盧俊義を第二の地位に据えることを正當化するための無理な設定が作られたのではなからうか。だとすれば、

設定の無理さ自體が、『水滸傳』が花石綱を含む物語を基
本にして、そこから花石綱を削除したものであることを示
しているように思われるのである。^⑩

更に、明初周憲王朱有燉の雜劇「豹子和尙」に見える三
十六人の名簿が、『宣和遺事』とほとんど一致している點
にも注意すべきであろう。この事實は、『宣和遺事』もし
くはそれと同内容のものが、明初の段階で印刷されて流布
していた可能性を示唆する。もし早い段階で印刷物になっ
て廣まっていたとすれば、『水滸傳』制作にあたって直接
利用された可能性は一段と高くなる。

以上の點から、『水滸傳』は『宣和遺事』を踏まえてい
る可能性が高いものと思われる。しかも『宣和遺事』で述
べられるのは梁山泊の成立過程であり、三十六人が勢揃い
して以降のことは、朝廷に歸順して官職を手に入れ、方臘
討伐に参加したことがごく簡単に述べられているにすぎず、
頭領の多くが死ぬことや、宋江が奸臣に毒殺されることな
どは全く見えない。つまり、『宣和遺事』とは梁山泊成立
の物語であり、安定と崩壞の物語は語られていないといふ

『水滸傳』成立考（小松）

ことになる。この點からも、さきあげた問に對する答、
即ち安定の部分と崩壞の部分とを欠いた梁山泊物語の來源に當てはまるこ
とになる。ただし崩壞の部分は、『宣和遺事』にも見えな
い。これはなぜか。

藝能においては、興味深い部分のみが語られるのが常で
ある。しかし、長篇小説となると首尾が必要になる。筆者
がかつて論じた一連の全相平話と『列國志傳』の關係は、
單發の講釋に由來する小説が長篇の形にまとめられるに當
たって、どのような作業が施されるかの歴史小説における
サンプルとなりうるものであった。^⑪ ここでは、講釋で語ら
れていたものと思われる興味深くかつ史實から遠い物語群
の間を、平板な歴史書の要約でつなぐという手法が取られ
ていた。ことはおそらく『水滸傳』においても同じだった
のではないか。梁山泊の物語が長篇小説にまとめられるに
あたつて、成立と安定の後に、物語の結末として崩壞を付
け加える必要が生じる。『水滸傳』の後半はそこで創作さ
れたものではなからうか。

こうした觀點に立つて、次に『宣和遺事』が『水滸傳』

の原型の少なくとも一つであると假定して、兩者の關係から『水滸傳』の成立過程について考えてみたい。假定の是非は、後に再検討することになるであろう。

四

『宣和遺事』と『水滸傳』を比較した時、最も顯著な相違は花石綱の有無、それに次ぐのは人物の異同ということになるであろう。花石綱物語がなくなつたのは、すでに指摘されているように、花石綱グループが太行山に上るという設定になつており、「太行山梁山泊」という地名が根本的にありえないものであることに由來しよう。太行山と梁山泊は一つにしようがなく、梁山泊を消しえない以上、太行山の方が消滅するのはいわば理の當然である。

するとことは二番目の問題、つまり人物の異同に關わつてくる。先に列擧したように、花石綱物語には十二人の豪傑が登場する。そして、十二人のうち『水滸傳』においても花石綱と關わりを持つのは楊志だけである。ということからは、楊志以外の十一人——李進義（盧俊義）・林冲・王雄

（楊雄）・花榮・柴進・張青（張清）・徐寧・李應・穆橫（穆弘）・關勝・孫立について『水滸傳』で語られている物語は、『宣和遺事』段階では存在しなかつたことになる。たとえば柴進の如きは、『水滸傳』では後周皇帝の末裔として、特權を持つ大貴族ということになつてゐるが、『宣和遺事』における柴進は、花石綱を運搬する軍人の一人である以上、もとより大貴族などではありやうがない。彼が後周皇帝の子孫という設定は、おそらく彼が後周帝室と同姓であることから生じてきたのであろう。その他『水滸傳』では重要な地位を占める盧俊義・林冲・花榮らの物語は、すべて後から加わつてきたものといふことになるのである。同様のことは、生辰綱メンバーのうち『水滸傳』と重複しない二人、即ち秦明と燕青についてもいへよう。そのように考えていくと、『水滸傳』における彼ら二人の來歴が花石綱のメンバー、花榮・盧俊義とセットになつて語られてゐることは甚だ示唆的である。更に、やはり『水滸傳』とは全く異なつた來歴が語られる索超・董平についても、同様のことが考えられる。

人物に關わるもう一つの問題は、宋江が梁山泊に上る際に伴った「九人」である。名前が直接あげられているのは朱全・雷横・李逵・戴宗・李海の五人だけで、後の四人は明記されていない。しかもここで「九人」というのは「十人」の誤りだとする見解も早くから示されている。というのは、このすぐ前にあげられている「天書」にあつた三十六人の名簿から他の箇所で見逃されているメンバーを除いていくと、五人が残るからである。具體的には史進・公孫勝・張順・武松・石秀がそれに當たる。ただし、この五人を全部含めると、數え方にもよるが、「天書」を基準にする限り、一人餘分が出ることになり帳尻が合わない。「一丈青張横」または「投降海賊李横」という人物がどうしてもみだすのである。「張横」であれば『水滸傳』にも見える名であるが、『水滸傳』における張横のあだな「船火兒」は、『宣和遺事』における張岑のあだな「火缸工」と似ており、そして『宣和遺事』においては張岑と張（李）横は完全な別人である。とすれば、張（李）横が張順に該當する可能性を考えざるをえないが、名前もあだなも違ふ以上、

『水滸傳』成立考（小松）

兩者を同一人物として考えることが可能かどうかは分らない。とりあえず、ここでは史進・公孫勝・武松・石秀は確實に宋江に隨行したメンバーであり、張順も含まれるかもしれないということ考察を進めていきたい。¹⁸⁾

この部分に關する問題は二つある。第一は、ここで宋江が伴つた九人（もしくは十人）とはどのような來歴を持つ人々なのかということ。そして第二は、四人（もしくは五人）の名前がなぜ出ないのかということである。この記述は、原文では「朱全雷横并李逵戴宗李海等九人」となっている。ここで「并」による區切りが入っているのは根據のないことではあるまい。『水滸傳』においても朱全・雷横と李逵・戴宗・李海（後）はグループを異にするからである。そこでは朱全・雷横が宋江地元の警察關係者であるのに對し、李逵以下の三人は宋江が江州に配流された折知り合つた面々であり、宋江とは特に深い關係を持つものとして描かれている。『宣和遺事』においては、もちろん宋江が江州に行くという展開はない（後に述べるように元雜劇における宋江の自己紹介に、江州配流の道中、梁山泊で晁蓋らに救

出されたところ。『水滸傳』の江州のくだりは、おそらくこの設定を展開させたものであろう。従つて、李逵たちの出自も全く不明ではあるが、宋江と個人的に結びついた集團であることには變わらないであらう。あるいは『水滸傳』の江州のくだりは、彼らと宋江との結びつきを説明するために生れたのかもしれない。

ではあとの四人もしくは五人の名前はなぜ記されていないのか。全體に『宣和遺事』の記述は、名前と人数に非常にこだわっている。これは三十六人をそろえねばならない以上、いわば當然のことであらう。ところがここだけ名前が缺けているのである。これには理由があるに違いない。その顔觸れを検討してみよう。史進・公孫勝・石秀・武松、それに五人だとすれば張順が加わる。このうち張順ははっきりと李逵らのグループに屬するが、後の四人はどうであらうか。まず史進については、すでに指摘されているように、『水滸傳』の出自以外に、雜劇「還牢末」や『水滸傳』第六十九回に見える東平出身者という經歷がある。公孫勝は、『癸辛雜識』「七修類稿」における三十六人の名簿

には見えない。しかも『水滸傳』では生辰綱のメンバーであるにもかかわらず、『宣和遺事』の生辰綱のくだりには現れない。つまり兩人とも出身・來歴がはっきりしない。

とすれば、ここで意圖的に名前が伏せられているのは、作者が彼らの出自をはっきり示したくなかったことに由來するのではないかという推定が成り立つ。つまり、彼らは名のみあつて物語を持たなかつたのではないか。すると後の二人、つまり武松と石秀も同様の問題を抱えているのではないかという推定が成り立つ^⑧。

そしてもう一つ、魯智深については「那時有僧人魯智深反叛、亦來投奔宋江（その時魯智深という僧も反逆して、宋江のもとに身を投じてまいりました）」とあるのみで、詳しいことは何も書かれてはいない。これも『宣和遺事』は魯智深の物語を詳しくは持ち合わせなかつたことを思わせるものである。魯智深についても、明初周憲王朱有燉の雜劇「豹子和尙」は、もと南陽廣慧寺の僧、戒律を守れず師に叱られて還俗し、梁山泊に入ったという『水滸傳』とは全く異なる履歷を伝え、母や妻子までが登場する。つまり魯智深

も史進同様複数の物語を持っていたことになる。そして先に述べたように、『水滸傳』における魯智深のキャラクターは陽明學左派の思想を體現したようなものである。とすれば、やはり現行『水滸傳』における魯智深像は明代中期以降になって成立した可能性が高いということになるのではなからうか。

では、これらの事實をとりあえず『水滸傳』前半に當てはめることにより、想定しうるその成立過程について考えてみよう。

五

『水滸傳』第一回は、いうまでもなく洪太尉により伏魔殿が開かれる發端の部分である。この箇所は、もとより『宣和遺事』や雜劇には見えないが、常識的に見て今の形の『水滸傳』ができあがった時に加わったものと見るべきであろう。

續く第二回から第三回にかけては、王進と史進の物語にあたる。つなぎともいふべき王進はともかく、史進の物語

『水滸傳』成立考(小松)

がどのような性格を持つかは問題である。ただ、さきふれたように『宣和遺事』においては史進の來歴が不明であるように思われること、雜劇「還牢末」では史進が東平の下つ端衛役とされていること、しかも『水滸傳』自體においても第六十九回で史進は東平にいたことがあるとされていることからすれば、この部分における史進を陝西の豪農の子とする設定は孤立したものであるように思われる。『水滸傳』における史進が後半では失態ばかり演じて、前半とは別人のようであることも、「還牢末」における史進がはなはださえないキャラクターとなっている點と符合する。そして史進は『宣和遺事』において宋江が伴った名前の出ない四人もしくは五人の一人であった。おそらく『水滸傳』のこの部分も、新しく作られたのではなからうか。

第三回の後半から第七回の前半までは魯智深の物語である。この部分は、魯智深以外には史進・李忠・周通が登場するのみで、しかも第六回瓦罐寺における史進には別段登場する必然性がなく、第五回桃花山における周通も、パターン化した賊をこらしめる話(例えば『西遊記』における

猪八戒登場の場面(の如く)のやられ役にすぎず、これが周通でなければならぬ必然性はない。李忠も周通とセットで登場するだけの存在であり、しかもすぐ前の打鎮關西のくだりで出たばかりの李忠がここでもう山賊の親分になっているというのはいささか不自然で、登場人物の数を限定しようという意圖も見えるようである。

つまり、このくだりは魯智深を主人公とした獨立した物語の挿入である可能性が高いものと思われる。事實、『宣和遺事』においても魯智深は來歴不明であった。『水滸傳』が『宣和遺事』に基づいているとすれば、史進の場合と同様、その出身物語を用意する必要があつたであろう。そしてその物語が史進の場合よりはるかに大規模であることは、新たな創作ではなく出來合のものを使用したことを思わせる。これらの諸事實と、『醉翁談錄』に「花和尚」という講談の題名が記録されていることを考え合わせれば、この部分は獨立した話本(この名稱の是非については議論があるが、本論文ではとりあえず單發ものの講談の意味で使用しておく)「花和尚」に基づく可能性が高いのではないかと思

われる。^②

第七回後半から第十一回までは林冲の物語である。林冲は『宣和遺事』では花石綱のメンバーであつた。ということは、當然ながらこの部分の物語は『宣和遺事』には存在しなかつたことになる。しかも林冲は、『癸辛雜識』『七修類稿』に見える三十六人の名簿には名が見えない。つまり、ありえたかもしれない別系統の傳承にも林冲の物語は存在しなかつたことになる。これらの諸點から考えて、『水滸傳』の林冲物語は新しく創作されたものである可能性が高いことになろう。この點で興味深いのは、林冲の性格が二重のものになつてゐることである。

全體的に見れば、林冲は善良で憤み深い人物として描かれ、そうした人間が不條理にも破滅させられていくところにこそ『水滸傳』の深みがあるわけのだが、よく見るとそれとは全く異なつた林冲像が一部に認められるのである。第十回で酒屋の李小二は次のようにいう。「林教頭は箇性急の人、摸不着便要殺人放火(林教頭さんは氣の短いお人で、うまくいかないとすぐに人を殺したり火を付けたりしようとなさ

る」。これが林冲を恩人として慕う男の林冲評價である。ところがここまで、林冲は陸謙の家をぶちこわしたりするものの、妻に非禮を働こうとした高衙内に對しても、上司の子ということで手を出しかねて魯智深に批判されるような分別くさい男とされており、彼が「殺人放火」する場面など一つもない。更に第十回の終わりには、農民たちに焚き火に當たらせてもらっておきながら、彼らが酒を分けてくれないというだけの理由で林冲が突然暴れだし、百姓たちを追い拂った上で「老爺快活吃酒（俺様は楽しく飲ませてもらおう）」とうそぶく場面がある。この李逵さながらの行動は、「林冲の變貌を暗示する」と指摘されているが、それにしても他の場面における林冲の性格からはあまりにかけ離れており、しかも先の李小二のせりふとは一致する。林冲の綽名「豹子頭」が張飛との類似を示唆することは、すでに指摘されている通りである。林冲の第二の性格は張飛に近いものといえよう。一方、『水滸傳』に遅れて成立したものと思われる『寶劍記』などの演劇においては、林冲は粗暴さをぬぐい去られ、ひたすら善良・誠實な人間と

『水滸傳』成立考（小松）

して描かれるようになる。元來張飛もどきであったはずの彼が、今日の演劇では鬚なしの二枚目になっているのである。『水滸傳』の林冲は、この變化の過渡期にあたるものではないだろうか。つまり、元來粗暴な林冲の物語があり、それが知識人により洗練された悲劇的な物語に改められた。林冲物語はもともと安定していなかっただけに、改變を受けやすかつたのではなからうか。

さて、第十二回になると楊志が登場する。そしてここで楊志の身の上話として、花石綱を運搬する十人の制使の一人であった楊志が途中で船を沈めてしまったことが語られ、更に、楊志が開封で傳家の寶刀を賣ろうとして、ごろつきの牛二にからまれて殺してしまう次第が續く。さきに述べたように、これらは『宣和遺事』では發端に置かれている物語である。つまり、『宣和遺事』の物語は、『水滸傳』では第十二回から始まるということになる。そしてこれ以降第二十二回までは、基本的に『宣和遺事』とほぼ同じ物語が續く。これはどう解釋すべきであろうか。

前々節で述べたように、太行山を排除するために花石綱

物語は削られたものと思われる。しかしそのままでは、いきなり生辰綱から話が始まってしまつて、話が單純になる上に、多くの豪傑の登場するきつかけが得られない。そこで生辰綱の前に、十一回にわたる發端の物語が置かれることになつたのであろう。ではなぜ楊志が花石綱運搬に失敗したことを、刀を賣ろうとして人を殺してしまふことが語られねばならないのか。一つには花石綱物語の主役が楊志である以上、これ以外に彼の履歴がなかつたためであらう。しかしもう一つ別の理由も想定可能である。それは次の第十三回との關わりの問題である。

第十三回においては、北京大名府に流された楊志が北京留守の梁中書に氣に入られ、練兵場で腕前を披露して管軍提轄使に任じられることが語られる。この物語は無論『宣和遺事』には含まれていない。ではいったいどこから來たのだろうか。ここで問題になるのが『醉翁談錄』に見える話本「青面獸」である。「青面獸」が楊志の綽名である以上、これは楊志の物語であつたと考えてまず間違ひあるまい。ではどのような内容のものだつたのか。無論第十二回

で語られているような内容であつた可能性もある。その場合は『宣和遺事』も「青面獸」を踏まえているということにならう。

しかし、ここで問題になるのは『醉翁談錄』において「青面獸」が置かれている位置である。「青面獸」の名が見える『醉翁談錄』「小説開闢」では、百七の「小説」が八つのジャンルに分けて列擧されている。そして、同じく梁山泊物語と思われる「花和尚」「武行者」が「捍（桿）棒」というジャンルに含まれるのに對し、「青面獸」のみは「朴刀」ジャンルに屬するとされる。この兩者にはどのような違いがあるのか。「桿棒」とは、棒のことであらう。一方「朴刀」は、長刀の柄をこく短くしたような武器である。そして兩者に含まれる物語を見ると、「朴刀」の方には「楊令公」の名が見える。これはいうまでもなく楊家將の初代楊繼業の物語であらう。おそらくその内容は、趙匡胤もしくは遼との合戦であらうと思われる。一方、「桿棒」のうち内容が推定できるものとしては「飛龍記」「攔路虎」「五郎爲僧」があげられる。「飛龍記」は後に『飛龍

全傳』にまとめられる宋の太祖趙匡胤の物語に違いない。

そこでは趙匡胤は、確かに棒を主な武器として各地で悪人退治を重ねる。「攔路虎」は『清平山堂話本』に見える

「楊温攔虎傳」の物語であろう。主人公の楊温は、やはり棒の達人で、奪われた妻を救い出そうと各地で試合を重ねる（なお楊温が『水滸傳』第七十八回に現れる十節度使の一人であろうと思われることは、すでに指摘されている通りである）。

「五郎爲僧」は、やはり楊家將中の楊五郎が出家する物語であろう。楊五郎も僧の常として、徒歩で戦うことが多い。

つまり、おそらく武器の性格からいっても、「朴刀」が甲冑を着け、馬に乗って戦うような武人の物語であるのに対し、「桿棒」は平時に好漢が試合や決闘を行う物語を主とするのではないかと思われる。とすれば「青面獸」も「朴刀」に含まれる以上、刀を賣る話ではなく、馬上で戦う話なのではないか。だとすれば、『水滸傳』第十三回こそそれにふさわしいのではなからうか。

この推定が正しいとすれば、「青面獸」の話を取り込むために、楊志が流されるという展開が必要になったのでは

『水滸傳』成立考（小松）

ないかと思われる。悪役のはずの梁中書が非常に好意的な人物として描かれていることの不自然さなども、元來梁中書ならざる人物を長官とする獨立した物語が、人名だけを差し替えて使用されているとすれば説明可能になる。

續く第十四回から第十六回までは生辰綱の物語。この部分は、人物に出入りがあることを除けばほとんど『宣和遺事』と變わらない。『水滸傳』成立の中核となったのは、

この部分と續く宋江物語なのであろう。ただメンバーに變化が生じていることは問題にせざるをえない。具體的には、『宣和遺事』の燕青と秦明が消え、替わって公孫勝と白勝が加わっているのである。地煞星の白勝はとりあえず検討の対象から外すとして、他の變更の理由は何であらうか。

二人が消えた原因の一つは數合わせであらう。『宣和遺事』の八人を北斗七星の數に合わせるためである。しかしそれでは一人減らすだけでよいであらう。そこでもう一つの理由が浮上する。即ち公孫勝の處理である。『宣和遺事』で名前を出ない四人の中に入っていた公孫勝は、『癸辛雜識』『七修類稿』にも見えない問題の人物であった。

その彼にはなばなしの出番を提供するため生辰綱が用意されたのであろう。ではなぜ燕青・秦明がはじきだされたのか。この点についてはしかとしたことはいえないが、もしかするとそれぞれ盧俊義・花榮という花石綱グループの人物とペアになった話が先に成立しかけていたのかもしれない。

第十七回は楊志と魯智深に一應のけりをつけるために挿入されたものと見るのが妥當であろう。そして第十八回から第二十二回までは、第二十一回の閻婆惜殺しを頂點とする宋江物語であり、生辰綱同様『宣和遺事』とはほぼ同じ内容を持つ。つまり第十二回から第二十二回までは、第十三回・第十七回という楊志を處理するための二回を除いて、ほぼ『宣和遺事』に沿っていることになる。このことは、この部分が『宣和遺事』を引き繼ぐ『水滸傳』の中核をなす部分であること（宋江・晁蓋という二人の首領と、吳用という軍師役がすべて登場する点からもそのことは明らかであろう）を示すとともに、楊志の處理に極端に重點が置かれていることは、花石綱物語の削除がかなり無理に行われたこと

名残といえよう。

第二十三回から第三十二回までは延々十回に及ぶ武松物語、いわゆる「武十回」である。武松は『宣和遺事』において名前の出なかつた四人の一人であつた。そこで彼の來歴が必要になつたのであろう。その際に利用されたのは、おそらく『醉翁談錄』に見える話本「武行者」だつたであらう。實際この場面では、前後のつなぎの部分に宋江が登場するのを除けば、天罡星三十六人は一人も登場せず、非常に獨立性が高い。ただし、「武十回」がすべて「武行者」に由來しているかは問題である。武松の性格に一貫しないところがあるという指摘もつとになされているが、それ以上に重要なのは、潘金蓮物語の獨自性であらう。特に第二十四回は、長さも極端に長く、次號掲載豫定の論文で述べるように形式にも特徴がある。潘金蓮物語は別の來歴を持つ物語の挿入である可能性も想定すべきであらう。

第三十三回から第三十五回までは清風山物語である。この部分で登場する天罡星は花榮と秦明であり、そして前者が花石綱十一人の一人、後者が『宣和遺事』では生辰綱に

登場しながら『水滸傳』では人数外になってしまった人物であることはすでに述べた通りである。ということは、當然ながらこの部分の物語は『宣和遺事』には存在しなかったことになる。その点で興味深いのは、この部分で登場する黄信の扱いである。青州兵馬都監という高級軍人であった黄信は、その地位にふさわしく梁山泊入りしてからも第八位という阮氏三兄弟より上の地位に置かれる(第三十五回)。更に第四十一回では、彼は戴宗・李逵・李俊・穆弘・張横・張順より上位に座っている。ところが、いつの間にか彼の地位は低下し、最終的には地煞星の第二位にまで落ち込んでしまうのである。これは、彼が花榮・秦明の物語の成立に当たって生まれた人物であり、従って三十六人の数には入りえなかったことに由来するのではなからうか。物語の都合上、梁山泊入りの当初では高い地位を與えないわけにはいかなかったものを、目立たないように少しずつ引き下げていったのであろう。

第三十六回から第四十一回までは、宋江の江州配流の物語である。ここで登場する天罡星は李俊・穆弘・張横・戴

『水滸傳』成立考(小松)

宗・李逵・張順の六人にのぼる。宋江の江州行きは、もとより『宣和遺事』には全く見えない話である。では後から完全に創作されたのかといえば、必ずしもそうではないらしい。すでに指摘されているように、例えば雜劇「還牢末」に「因帶酒殺了娼妓閻婆惜、迭配江州牢城、路打梁山泊所過、有我結義哥哥晁蓋……(酔つて娼妓閻婆惜を殺してしまひまして、江州牢城に流されることになりましたが、梁山泊を通りかかったところを、義理の兄の晁蓋が……)」(脈望館抄本による)というような敘述が幾つかの雜劇の白に見えるのである。²⁸⁾ 雜劇の白の成立時期を確定することが困難である以上、これがどのような段階の梁山泊物語を反映したものであるかは定かではないが、ともあれ『水滸傳』成立以前に江州に配流される途中で宋江が救われるという設定が存在したことは間違いない。それが『水滸傳』では、梁山泊は通るものの、宋江は仲間入りの誘いを断つて、實際に江州に赴くことになっている。これはなぜであらう。

『宣和遺事』では宋江は九人を伴って梁山泊に上ることになっていた。そのうち四人は問題の名前の見えない面々

であるが、残り五人は雷横・朱仝と李逵・戴宗・李海（李俊と同一人物と思われる）であり、かつ前の二人と後の三人の間には區別があるものと思われることもすでに述べた通りである。この後の三人が、『水滸傳』の江州物語で登場する六人のうち半分を占めている。そして彼らの來歴は述べられていない。残り三人のうち穆弘は花石綱のメンバー、張横・張順は、これもすでに述べたように、『宣和遺事』における位置づけがはつきりしない人物である。『水滸傳』における江州物語は、彼ら『宣和遺事』からは來歴を讀みとることのできない人々に來歴を與えるために、宋江の閻婆惜殺しと李逵・戴宗・李俊の梁山泊入りの間に設けられた物語ではなからうか。

續く第四十二回は宋江が天書を受ける物語である。この話は『宣和遺事』にもあるが、位置が異なり、宋江の梁山泊入りの前に置かれている。『水滸傳』では宋江が官兵に追われる話が第三十五回と第四十二回の二度にわたって現れるが、これは元來第三十五回にあるべき天書を受ける話を後に移したために生じた重複であろう。ではなぜ後に移

す必要があつたのか。宋江が一度官兵に捕えられ、江州に流されなければならなかつたからである。

そして、『宣和遺事』の物語は事實上ここで終わる。無論『宣和遺事』においても、この後魯智深・呼延灼・李横（張横）の梁山泊入りが語られ、特に呼延灼のそれは討伐軍の大將でありながら降伏するという點で『水滸傳』の呼延灼と重なるものがあるが、いずれも敘述は極めて簡略で細部は不明というほかない。その後の招安は更に簡單にふれられるだけであり、方臘討伐に至つては「後遣宋江收方臘有功、封節度使」と一言で片づけられ、豪傑の面々が討伐に参加して命を落とすことなど一切言及されていないのである。この點から見ても、すでに述べたように『宣和遺事』は梁山泊成立の物語であつて、安定と崩壞は語られず、特に崩壞については物語自體存在しなかつた可能性が高いものと思われる。

さて、前に假定したように『水滸傳』が『宣和遺事』に依據して成立したものであるとすれば、呼延灼が官軍の將として來襲することを唯一の例外として、これ以降はその

原據を失うことになる。では、残りの部分はどのようにして制作されたのであろうか。一つ考えられるのは、いうまでもないことだが新たに創作された可能性であり、もう一つは『宣和遺事』以外の原據の存在である。その點を頭に入れた上で、以下の部分について考えてみよう。

第四十三回は、いわゆる「李逵探母」の物語である。この話がなくてはならない必然性は認められず、獨立性が強いと思われるが、その來源は定かではない。ただ李逵の虎殺しが武松の虎殺しの焼き直しと思われる點からすると、その成立は比較的新しい可能性が高いであろう。

續く第四十四回から第四十六回までは石秀と楊雄による潘巧雲殺しの物語である。石秀は『宣和遺事』におけるあの名前の見えない四人の一人、楊雄は花石綱のメンバーであった。こうした點から考えれば、この物語は新しく作られたものである可能性が高くなってこよう。事實その内容には、ヒロインの姓が共通することを初めとして、潘金蓮物語と共通する點が多く、更に『水滸傳』には珍しく、心理描寫を多く含むことなど、他とは性格を異にする要素を

持つている。おそらくこの部分は、『水滸傳』の中でもかなり新しい層に屬するのではなからうか。

第四十七回から第五十回までは「三打祝家莊」の物語である。この話は『宣和遺事』にこそ見えないものの、雜劇の白においては多く言及されており、しかも『水滸傳』では曾頭市で死ぬ晁蓋は、雜劇の世界では祝家莊で死ぬことになっていたらしい。このことは、宮崎市定博士がつとに指摘しておられるように、元來祝家莊の話として語られていたものが、ほぼ同内容の曾頭市を増やすことにより、二つに分けて語られることとなったものであろう。従って、具體的な出自は不明ではあるが、祝家莊も古い來歴を持つことが考えられる。ただし、この部分は『水滸傳』において梁山泊集團が初めて本格的な集團戦を行う場面であり、これ以前の豪傑銘々傳の結合ともいべき部分とは本質的に性格を異にする點には注意が必要であらう。祝家莊物語の中では、石秀がわずかに個人的才幹を發揮することを除けば、豪傑がその個性を示す機會はほとんどないと言っても過言ではない。ところが興味深いことに、その中に一つ

全く異質な要素が含まれている。第四十九回の解珍・解寶の物語である。

第四十七・四十八回と祝家莊との戦いが語られる中に、突然吳用の言葉という枠組みを借りて、別の話が挿入される。即ち、罪なくして捕えられた解珍・解寶兄弟を救うために、孫立・孫新兄弟と顧大嫂・樂和・鄒淵・鄒潤らが蜂起するという物語である。この解珍・解寶は、『宣和遺事』の三十六人の中には見えないが、『癸辛雜識』『七修類稿』には名前が出る。また孫立は、三種すべてに名が見えるにもかかわらず、なぜか『水滸傳』では地煞星とされている問題の人物である。そして彼は『宣和遺事』では、花石綱物語において楊志に次ぐ重要な地位を占めていた。この真相は定かではないが、ともあれこの物語は、『宣和遺事』とは全く別系統に属するか、もしくは別系統に属する人物を導入するために創作されたかのいずれかであろう。とすれば、前後の祝家莊の物語とはかなり異質のものであるに違いない。

以上見てきたように、『水滸傳』第四十六回までは、第

十二回から第二十二回までと第四十二回という『宣和遺事』に依據する部分を中核とし、それに話本に由来するものや新たに創作したと思われる物語を付加して構成した、豪傑銘々傳の連続というべき體制をとっていた。次々と主役が入れ替わっていく「連環體」と呼ばれるスタイルは、こうした體制から必然的にもたらされたものである。そして追加されたと思われる物語の主人公が、花石綱のメンバーや來歴不明の四人といった『宣和遺事』ではその出自を知りえない人々であることは、『水滸傳』制作にあたって『宣和遺事』がその骨格として利用されたことを示しているように思われる。

第四十七回以降の祝家莊物語から、『水滸傳』は變質し始める。個人的豪傑の活躍から、集團としての梁山泊を描くように轉じるのである。この始まりが、『宣和遺事』の事實上の終わりとほぼ一致していることは興味深い。『宣和遺事』の梁山泊物語とは、個人的豪傑の活躍を描くものだったのである。常識的に考えて、任侠ものの講談とはそういうものである。すると、祝家莊以下はかなり性格を

異にすることになってくる。次に後半部について、おおまかな見取り圖を描いてみることにしよう。

六

後半、第七十一回における勢揃いまでは、①第五十一回における雷横・朱全の物語、②第五十二回から第五十四回までの高廉の物語（第五十三回は羅眞人の物語）、③第五十五回から第五十七回までの呼延灼の物語（第五十六回は徐寧の物語）、④第五十八回における三山合流、⑤第五十九回における華山の物語、⑥第六十回における曾頭市の物語（その二）、⑦第六十一回から第六十六回までの盧俊義の物語（そのうち第六十四回は關勝、第六十五回は安道全の物語）、⑧第六十七回における水火二將の物語、⑨第六十八回における曾頭市の物語（その二）、⑩第六十九回における董平の物語、⑪第七十回における張清の物語ということになる。

つまり、①と⑤を除いて、羅眞人・徐寧や盧俊義物語の前半など多少の世話物的挿話を含みつつも、大半は官軍・私軍との集團戦と、高廉を唯一の例外とする官軍の將の梁

山泊入りを語る。そして②については柴進・公孫勝、③については徐寧、⑤については史進、⑦については盧俊義・燕青・關勝、⑪については張清と、いずれも花石綱のメンパー、もしくは例の出自不明の四人や生辰綱から除かれた二人に含まれる人物が主役格で登場する。また⑩の董平も、『宣和遺事』では捕り手という全く違った役回りを演じていた。④⑥⑨は多數の人物が一度に登場し、⑧は主役格に天罡星がいない。こうしてみると、この部分の中で『宣和遺事』と矛盾を來さない可能性があるのは①、即ち朱全と雷横の梁山泊入りを語る部分と、③の前半、即ち呼延灼の襲來を語る部分だけということになる。しかも『宣和遺事』に朱全と雷横は宋江とともに梁山泊に上ったとある以上、①も『宣和遺事』と完全に整合性を持つとは言いえない。逆に言うと、①及び③の前半以外は、『宣和遺事』が『水滸傳』に改められるに當たつて捨てられた人物を拾い上げて利用した部分だということになる。その意味では第十一回までと似通うものがあるが、すべて集團戦となり、物語の様相が一變していることは、前述した通りである。

もともになったと思われる話本なども無論存在しない。この部分は、部位により差こそあれ、基本的には前半の續き、梁山泊集團完成の部分として創作された可能性が高いのではなからうか。

これ以降は、既述のように第七十三・七十四回に元雜劇由來かと思われる挿話があるほか、第九十回に征遼と方臘のつなぎとして、やはり元雜劇に取り上げられていた「燕青射雁」が置かれているのを除けば、第七十二回及び第七十五―八十二回の招安物語、第八十三回から第八十九回までの征遼物語、第九十一回から第九十九回までの方臘討伐物語と、第百回の結びを別にすれば、三つの大きいグループから構成されている。一つの物語の占める紙幅が長くなっていることは、一つの素材を増しして用いたことのあるあらわれであろう。事實、この部分が冗長で精彩に缺けることは定評のあるところである。この點から考えると、さきに推定したように最後の部分は梁山泊の崩壊を語るべくある作者が創作したものである可能性が高いのではなからうか。ただし、これは三つの部分を一人が創作したという

意味ではない。かねてより後の挿入か否かが議論の的となっている征遼物語が、例えば方臘物語と同一人物によって書かれたものかは、もとより疑問である。

以上、『宣和遺事』をはじめとする先行文献との關係から、『水滸傳』の成立過程について考えてみた。しかし、最初にも述べたように、結局のところこの手法では、最終的には論者の解釋が入らないわけにはいかず、どうしても客観性に缺けることとならざるをえない憾みがある。

そこで、次號掲載豫定の論文においては、主觀の入る餘地が少ないと思われる手法を用いて容與堂本文を解析することに、本論文で示した假説を検證し、『水滸傳』成立史をある程度解明すべく試みてみたい。その手法とは、具體的には使用語彙と、白話小説特有のテクニカルチームの分析である。

註

① 容與堂本のテキストとしては、『古本小説集成』（上海古籍出版社）所收の北京圖書館所藏本の影印を用いる。

② 施耐庵の家譜なるものを示す江蘇省社會科學院文學研究所

編『施耐庵研究』（江蘇古籍出版社一九八四）などはその顯著な一例といえよう。この点については高島俊男『水滸傳の世界』（大修館一九八七、ちくま文庫二〇〇一）「十一 誰が水滸傳を書いたか」に適切な要約がある。

- ③ 宮崎市定『水滸傳——虚構の中の史實』（中公新書一九七二、後『宮崎市定全集』第十二卷『岩波書店一九九二』）に収録。「まえがき」には「百回本の成立はおそらく明代も末に近くなつて、嘉靖年間（一五二一—一五六六）、或いはそれ以後と思われる」とし、同書「戴宗と李逵」では、第六十九回のモデルとなつたと思われる事件が萬曆二十（一五九二）年に發生していることから、百回本の成立をその後間もない時期と見る。

- ④ 高田虔次『中國における近代思惟の挫折』（筑摩書房一九四五）「第三章 李卓吾」一八〇頁以下・『朱子學と陽明學』（岩波新書一九六七）「儒教の叛逆者・李贄（卓吾）」一七一頁以下。

- ⑤ 入矢義高『明代詩文』（筑摩書房一九七八）「擬古主義の陰翳——李夢陽と何景明の場合」。

- ⑥ 高島前掲書「五人の殺しかたについて」は、魯智深と武松の殺人について對比的に詳しく述べており、以下の論旨と重なる點が多い。

- ⑦ 註⑥に引いた論考は、鴛鴦樓について「無鐵砲でいきあたりばったり」と評價する。

『水滸傳』成立考（小松）

- ⑧ 『古本小説集成』所收のテキストは「武松兄」となっているが、『明清善本小説叢刊』所收の容與堂本（内閣文庫本であろう）は「字分のスペースに「兄弟」の二字を詰め込んでいる。他のテキストは「兄弟」に作る。

- ⑨ 佐藤鍊太郎「李卓吾評『忠義水滸傳』について」（『東方學』第七十一輯（一九九六年一月））。

- ⑩ 『水滸傳』及び李卓吾批評における「忠義」が「損得や結果にこだわらず、わが身の犠牲を顧みず、甚しくはわが身を捨てて、他人のために力を盡くすこと」という意味を持つことについては、笠井直美「隠蔽されたもう一つの忠義——『水滸傳』の忠義をめぐる論議に関する一視點——」（『日本

中國學會報』第四十四集（一九九二年十月）に詳しい。

- ⑪ 岸本美緒『明清交替と江南社會——十七世紀中國の秩序問題』（東京大學出版會一九九九）第一章「明末清初の地方社會と「世論」・第三章「明末社會と陽明學」。

- ⑫ 中鉢雅量『中國小説史研究——水滸傳を中心として——』（汲古書院一九九六）「第五章 金聖嘆の水滸傳觀」注（10）に金聖嘆による本文書き換えの詳しい分析がある。

- ⑬ 例えば佐竹靖彦『梁山泊』（中公新書 一九九二）は明初、大塚秀高「水滸說話について——「宣和遺事」を端緒として」（『中國古典小説研究動態』第二號（一九八八年十月））は元初の成立とする。

- ⑭ 拙著『中國古典演劇研究』（汲古書院二〇〇二）「Ⅱ 明代

における元雜劇」の各章。

- ⑮ 笠井直美「『義賊』の誕生——雜劇『水滸』から小説『水滸』へ」(『東洋文化』第七十一號「東京大學東洋文化研究所一九九〇年十二月」)など。
- ⑯ 高島前掲書「三 副將盧俊義」にこの點に關する詳しい分析がある。
- ⑰ 拙著「中國歴史小説研究」(汲古書院二〇〇一)第一章「『列國志傳』の成立と展開」。
- ⑱ この點に關しては大塚前掲論文に詳しい考證がある。
- ⑲ 王利器「『水滸全傳』是怎样纂修的」(『耐雪堂集』〔中國社會科學出版社一九八六〕所收)・高島前掲書「十 講釋から芝居まで」など。
- ⑳ この點について大塚前掲論文は「宋江グループが急遽員數合わせされた、その多くが固有舊來の説話を持たぬグループ」であることを示唆するとする。
- ㉑ 大塚前掲論文も史進の出自について「原『水滸傳』の編者により新たに付與されたに相違ない」とする。
- ㉒ 大塚前掲論文はこの部分を「花和尚」に由来するとして、大膽な假説を展開する。
- ㉓ 高島前掲書「五 人の殺しかた」。
- ㉔ 王利器「『水滸』英雄的綽號」(『耐雪堂集』〔中國社會科學出版社一九八六〕所收)など。
- ㉕ 大塚前掲論文は、多少異なつた觀點から林冲物語について、
- 「こうした部分が百回本成立時に、その編者により加筆された部分であることを暗示するかに見える」とする。
- ⑳ 大塚秀高「中國小説史への視點」(放送大學教育振興會一九八七)「7 短篇小説だつた水滸傳」(梁山にのほれなかつた好漢たち)。
- ㉑ 高島前掲書「九 武松の十回」。
- ㉒ 高島前掲書「十 講釋から芝居まで」など。
- ㉓ 宮崎市定「水滸傳的傷痕——現行本成立過程の分析——」(『東方學』第六輯〔一九六七年六月〕、「全集」第十二卷所收)。
- ㉔ 註㉑に同じ。
- ㉕ 『録鬼簿』、『太和正音譜』の李文蔚の項に、「燕青射雁」が著録されているが、今には傳わらない。